

## 「トイレの絆」

高知県 芸西村立芸西中学校 3年  
岡林 一輝 (おかばやし かずき)

夏休みに入って何日か経った頃、母が僕に言った。

「今日は仕事が遅くなるから、母屋のポータブルトイレを洗っといて。」

僕の家から歩いて三分くらいにある母屋には、八十五歳の祖父と、八十一歳の祖母が二人で住んでいる。祖父は在宅酸素療法をしていて、週に四回デイサービスに行く以外は、家でほとんど寝たきりで、高齢の祖母が食事やトイレの世話をしていた。ところが、その祖母が土間で転倒し、右足のかかとを骨折。数ヶ月の間、足を固定して安静にしなければならなくなった。

母屋は築百年以上経つ古い家で、台所は土間だし、トイレと風呂は外にある。松葉づえをつけない祖母は何一つ動きがとれない。

それからというもの、一人娘の母はてんてこ舞いだ。朝は四時半に起きて僕らの弁当と祖父母の朝と昼の弁当を作る。母屋に行って弁当を渡し、ポータブルトイレを洗って仕事に行く。夜帰った後、僕らの夕飯と祖父母の晩の弁当を作る。母屋に行って弁当と洗濯物を渡し、ポータブルトイレを洗う。祖母の一日分のグチを聞く。家に帰って明日の弁当の準備をする、というのが日常になった。

土曜日には祖母を風呂に入れるため、父が僕の家の上階にある風呂まで背負って運び、置き物のように動かない祖母を母がゴシゴシ洗う。

「動けないくせに口の達者な年寄りほど厄介なものはない…」

と、ぼやきながらも甲斐甲斐しく世話をしている。

そこで僕は、少しでも力になろうと部活の帰りに母屋に寄った。

「おばあちゃん、トイレ換えに来たで。」

と、ポータブルトイレのふたを開けてびっくり！そこにはビールの小ビンくらいあるでっかいウンコがでーんと居座っていた。

「うわーっ！」僕は思わず叫んだ。祖母は顔を覆って

「ヒッヒッヒッ…」と恥ずかしそうに、でもちょっと誇らしげに笑い、

「あんたの母ちゃんに遠慮して、大便是週に一回しかせんことにしたわ。」と強がりを行った。どうやら僕は、その一週間目に当たったようだ。ずっしりと重いバケツを持ち上げつつ外のトイレに向かった。不思議と「汚い。」とか「嫌だ。」とは全く思わなかった。むしろこの年齢でこんな立派なウンコが出せるとは、やはり祖母はただ者ではないと感心した。トイレにザーッと移しても、そのウンコだけはビクともしない。勢いをつけてもう一度バケツを傾けてみた。ウンコはゴ

ロゴロゴロと音を立てて落ちた。そして母に言われたとおりに庭の水道でバケツを洗い、青い防臭液を入れて元に戻した。僕はなぜか今までに味わったことのない達成感でいっぱいになった。

その後、朝と晩のトイレの始末が僕の日課になったある日、僕は祖母から手紙を渡された。果たし状のように折りたたまれた紙を恐る恐る開けてみると、それはきれいな字で書かれた「感謝状」だった。そこには僕が産まれたときの様子から始まり、現在までの僕への思い、自分の不注意で皆に迷惑をかけて申し訳ないこと、僕が黙ってトイレの始末をすることに対し、情けない気持ちと感謝の気持ちで毎日泣いていること、口に出して

「ありがとう。」

と言えないもどかしさが切々とつづられていた。

僕は単純にうれしかった。と同時に、いつも親分肌でごう慢な祖母の意外な一面に、今回の骨折のダメージは相当大きいということが分かった。

祖母の骨折によって、僕も、母も、父も、妹も、毎日すごく大変だけど、今何事にも代えがたい貴重な体験をしている気がする。というのは、いくら祖父母が長生きをしたとしても、年齢的にあと何十年も生きることはない。別々の家で別々の生活をし、近いようで遠い中途半端な関係のままであっただろう。でも、今回の骨折事件が家族の絆を深め、限られた時間をより充実したものにする、良いきっかけになったのではないかと僕は思っている。

もうすぐ夏休みが終わる。

僕は今日もポータブルを換えに母屋に行く。二人とも、どんなウンコをしてるか、ちょっとドキドキしながら。